基礎演習　長谷川 伸先生

「マネー」

提出日：1998 年 1 月 8 日（木）

＊＊＊＊＊もくじ＊＊＊＊＊

はじめに　ｐ３

第一章 日本貨幣史を見て…

第一節 古代貨幣観とは？ ｐ３

第二節　中世の貨幣観とは？ ｐ４

第三節　近世の貨幣観とは？ ｐ４．５

第四節　近・現代の貨幣観とは？ ｐ５．６

第二章　歴史から現在へ…

第一節　バブル期の貨幣・そして銀行 ｐ７

第二節　バブル崩壊後の今日の課題とは？

ｐ７

おわりに　ｐ８

参考文献リスト

はじめに

私達は、普段何気なくお金を使っているが、今日、生きてゆくのに欠かせないこの「お金」とはどのようにして普及していったのであろうか？日頃からきになっていたこの問題を追求していくためには、日本貨幣史を調べる必要がある。そして、日本貨幣史を古代から現在に至るまでを展望しつつ、現在か変えている問題点を追求していこう。

第一章　日本貨幣史を見て…

第一節 古代の貨幣観とは？

まず、古代の貨幣とは、どんなものであったか？『日本では８世紀初に唐銭（開元通宝）をモデルにして鋳造された和同開珎が最初の貨幣といわれている。これは、当時の中国の先進的な文化制度を積極的に取り入れようとした現れと見られる。和同開珎以降約２５０年間に作られた皇朝銭はすべて唐銭をモデルとした。皇朝銭は１０世紀末には製造・発行が中止され、以後公鋳貨幣の存在しない社会に戻ったが、これは当時の経済社会が本格的な貨幣を必要とするまでに成熟していなかったところに、律令制府が強引に中国の貨幣を導入しようとした結果とされることが多い。実際、古代から中世にかけては、一般財物の価値計算基準は「米」または「絹」であり、それらの物品貨幣が貨幣の代用品としての役割を果たしていた事例を見つけるのはそう難しいことではない。』[1]
確かにこれまで物々交換で成り立ってきた社会に貨幣観念を吹き込むのは困難であろう。なぜなら今までならそのまま利用価値のある食べ物・品物が直接手には入っていたのにそれがコイン１つと変えられてしまうのでは損した気分になるかもしれない。貨幣の価値観がない頃なら当然のことだろう。

第二節　中世の貨幣観とは？

そもそも「お金」＝「貨幣」とはいったい何なのであろうか？また、貨幣が貨幣としての機能を果たしていたかどうかは、やはり貨幣の機能として何を考えるかという問題に帰着することになろうが、そもそも貨幣の機能とはいったい何なのだろうか？それを探りつつ中世の貨幣についてみていこう。『平安末期以降、農業生産の増大や織物、鍛冶の手工業の発達を背景とする交換経済の拡大とともに、貨幣に対する需要が高まってきたが、既に皇朝銭の鋳造は行われていなかったため、貨幣は当時日宋貿易を通じて流入してきた中国銭に依存していた。その後、戦国時代後期にいたるまで、５００年もの間、自国通貨を発行せず、外国通貨の輸入によって貨幣需要を賄った事例は世界的に見ても例がない。輸入通過を国内通過として利用した結果、磨滅・破損の著しいものなどが見られるようになったため、１５世紀後半から銭貨をその室の優劣により良銭と悪銭に区分の上、悪銭については受け取り拒否、あるいは割り増しをつけて受け取るというえり銭が広範化した。室町幕府をはじめ大名達は「えり銭令」でえり銭を禁止し、貨幣の円滑な流通を計ろうとしたが、えり銭行為は容易にはなくならなかった。』[2]
『貨幣は商品の売買取引を活発化させただけでなく、鎌倉以降は租税の銭納方式の出現と普及、土倉と称される市中金融業者の生成、発展による金銭貸借取引の盛行をもたらし、江戸時代中期に確立したとされる町民主動の全国的な貨幣経済体制の先駆的体制が室町時代に既に成立していたらしい。』[3] 私がここで思うに、いくら当時のわが国では金銀の産出が限られていたとはいえ、需要の高まった貨幣を全て外国のものに依存するところは、日本という国の自立性のなさがうかがえる。中世とは、初めて、貨幣がその機能、制度だけから捉えられるのではなく、『実生活との関わり』[4]を重要視して分析された時代なのである。またこの時代より「お金」＝「貨幣」の機能とは、商業流通を円滑にするものであり、「お金」＝「貨幣」とはその機能を活用するための手段の一つだといえる。

第三節　近世の貨幣観とは？

日本における貨幣制度の確立は、金・銀・銭という三貨と、為替、藩札といった通貨が併用された江戸時代と考えられるが、一体どのように確立していったのであろうか？その過程を展望していくとしよう。『１６世紀戦国時代後期には、金貨・銀貨が作られるようになった。戦国大名による楽市・楽座等の商業振興策による城下町を中心とした商工業の発達が貨幣による取引を急速に発展させたと考えられるのである。織田信長後を継いで天下を統一した豊臣秀吉は、武将達の勢力を抑制するため、金銀鉱山の接収や産出金銀の上納制度により多くの金銀を手中にし、これを用いて種々の金銀貨を作成した。これらは

徳川氏による貨幣制度統一の先駆的な役割を果たすことになるが、本格的な貨幣としての金銀貨の成立にはまだしばらくの時間が必要であった。関ヶ原の戦いを制した徳川氏は、慶長金銀貨を発行するとともに、渡来銭が主流であった銭貨にも自ら寛永通宝の鋳造を開始し銭貨の統一を図っていった。こうした貨幣間の交換取引を担う主体として両替商が発達したが、両替商は両替業の他、貸出、預金、為替といった現在の金融機関に当たる事務をこなした。当時の二大経済圏であった江戸と大阪では両替商の役割にも違いが見られ、特に大阪では寛永５年以降、商人が手に入れた貨幣を両替商に預金し、この預金を引当てとする銀目手形により支払債務の決済が行われるのが一般的となっていた。商品取引決済のための為替機構も１７世紀までに相当程度整備された。』[5]そもそも貨幣には「コイン」と「紙幣」がある。『江戸幕府は、貨幣による貨幣制度の成立を目指したが、領国経済の発展に伴って小額貨幣に対する需要が増大し、貨幣のみで円滑な経済運営を行うことが難しくなり、私札・藩札といった紙幣が登場、流通するようになった。わが国の紙幣の起源は１６世紀ないし１７世紀に発行された私札にまで遡ることができるが、代表例として「山田羽書」が挙げられる。もちろん羽書は流通範囲の限定された私札だが、次第に流通範囲を拡大し、やがては藩札の発行につながるという点で日本の紙幣の起源を位置づけることができると思われる。』［6］すなわち「貨幣」のうち「紙幣」とは「コイン」を補佐するために作られたものなのである。また江戸時代とは金・銀・銭の三貨制度や通貨の発行にもかかわらず、中央銀行が存在しない中で流通が図られた貴重な時代だといえる。

第四節　近・現代の貨幣観とは？

しかしながら、現在のように「円」という概念は近世には誕生していない。従って、明治以降の新貨条例による「円」の誕生または日本銀行設立による日本銀行券の発行とうに関わる歴史が気にかかるところである。

『「太政官札」と呼ばれる政府紙幣が明治元年に発行されたが、もともと国庫の窮乏を補填し、各藩に殖産興業資金を貸し出すことを目的としていたものの、新政府の権威が確立していない段階で発行されたことから、兌換準備や発行額制限もなかったため、その価値は著しく下落し、貨幣制度の混乱に拍車をかけた。こうしたなか明治４年、政府は欧州主要国金本位制に移行していく傾向を眺め、「新貨条例」を制定し、貨幣制度統一を目指した。明治１０年、西南戦争勃発に伴い、戦費調達を目的として紙幣が増発され激しいインフレが発生した。この過程で、兌換銀行券の一元的な発行によって紙幣乱発回避と通貨価値安定を図ることの重要性が認識され明治１５年中央銀行として日本銀行が設立された。日本銀行券は銀兌換券として出発したが、世界的な銀増加による銀の金に対する価値が下落し、金貨と引き換えられる「日本銀行兌換券」が発行されるにいたった。日本銀行券の兌換は昭和６年にイギリスが金本位制を離脱したのと金輸出が禁止された時点で停止され、

昭和１７年には日本銀行法制定により管理通貨制度に移行した。第２次大戦後財政建直しと終戦処理のため巨額の財政支出が行われ、激しいインフレがおこった。そこで昭和２１年「新円切り替え」を実施したが、その克服には１９４９年頃までの時間を要した。
このように新貨条例によって「円」は成立し、また普及したわけであるが、その根底には、江戸時代末期の実質的金本位制があり、その後の近代紙幣の普及も江戸時代の貨幣観と藩札・私札等の影響を大いに受けていると考えられる。』［7］このようにして、江戸時代にはなかった流通機構の中心に日本銀行が据えられ、今日のように通貨の量を調整して円滑を図る組織が完成したのである。

第二章　歴史から現在へ…

第一節　バブル期の貨幣・そして銀行

以上が貨幣観の歴史であるが、今日の銀行グループに目を移してみよう。まず銀行をめぐる環境が著しく変化した１９８０年代に目をむけてみよう。『わが国ではバブル時代の特金運用からスタートし、銀行の株式営業と勘違いし、証券会社の営業マンをリクルートし、バックファイナンス付き短期利回り保証商品をセールスするという基本的間違いを犯した。問題化したのは土地バブルの潮流に乗り遅れないために銀行融資規制の及ばないノンバンク群であり銀行の業務補完を行うため、リース会社、抵当証券会社等が登場した。これらの共通点は「資金使途を問わない不動産担保融資」にかんするぎんこうべつどうたいであり、あんいなゆうしにかかわったきかんであることでありいまこれらが巨大な不良債権の製造元となり、銀行の足を引っ張っている。国民的規模で問題となった住専も複数金融機関が親で相乗りの会社であったことや、大蔵省の行政の強く及んだ業界だったので、個々の金融機関の経営方針が浸透し難かったことが、後日の責任回避につながり問題をこじらせた１つの大きな要因になった。』[8]いずれにしても罪のなすりあいをして責任逃れをするのは見苦しいことである。住専問題の一番厄介な点は、国民的規模の問題でありながら、国民に詳細を明らかにしようとせず、後始末だけつけさせようというところである。国民あってこその政治経済なのだから、国民をないがしろにするのは言語道断である。

第二節　バブル崩壊後の今日の課題とは？

次にバブル崩壊後の今日を見てみると、『銀行間連記業すべての共通点は、基本的に親銀行の経営支配力や影響力がほぼ１００％行使され、企業の独立性が原則排除されていることだが、これは「銀行グループ企業」の新たな課題である。なぜなら、将来を展望した場合バブル崩壊後の金融システム再構築銀行のリストら、金融ニーズ変遷など、広範囲にわたる環境変化を踏まえ、もはや「銀行丸抱え」という従来的発想は放棄しなければならない段階に来ているからである。』[9]
従って今後の課題とは、不良債権処理過程での膨大な損失負担などであろうし、『伝統的に作られた硬直的な経営環境』[10]から一歩出てみて、その効力を十分に反映できるよう努めることが最大の課題であろう。

おわりに

以上現在に至るまでの貨幣観を見てきたわけであるが、貨幣とはいつの時代も、その利用価値を決めるのは人間であり、それをいいことに乱用したり、用途を間違えないよう、よく検討すべきである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊参考文献リスト＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

［1］「金融研究」　～貨幣学の歴史と今後の発展可能性について～　2.日本貨幣史と貨幣研究の歩み　（1）古代の貨幣　　大久保　隆・鹿野　嘉昭　　1996.3

［2］同論文　　（2）中世の貨幣

［3］『渡来銭の社会史』　　三上　隆三　　1987

［4］「金融研究」　～貨幣学の歴史と今後の発展の可能性について～　（2）中世の貨幣

［5］[6]同論文　　（3）近世の貨幣

［7］同論文　　（4）近・現代の貨幣

［8］「金融ジャーナル」　～銀行グループ戦略の課題～　　3.戦略指向の段階
　　津田　和夫　　1999.11

[9] [10]　同論文　1.問題の総括